

# 反障害通信

13. 10. 21

43号

## 今年のウソつき大賞―「裸の王様」的安倍首相の言動―

安倍首相のうそつきぶりを感じたのは、原発の海外への売り込みに行き、「原発事故の処理で技術を獲得したから、その技術をもった原発を買って欲しい」という信じられない話をしている映像が流されていたときです。信じられない話です。そもそも、フクシマ原発事故の時、それに対応できないような技術であったということが、露呈していました。そして、事故処理段階で、何度も対応できない様を示し、さらに収束宣言した後で汚染水問題が起きていたのに、もう処理がすんだかのように、財界の営業部長よろしく原発の売り込みなど始めたのです。

そして極めつけは、汚染水問題が大きく報道される中でのオリンピック誘致のIOCでの演説で、汚染水は海に出ていない、汚染水は完全にコントロールしている、という大嘘をついたのです。もしウソつき大賞ということがあるとしたら、今年は間違いなくこの安倍演説がとることになります。

このひとには、うそという自覚がないのかもしれないかもしれません。裸の王様の話を想起させます。自分でも裸ではないかと思いつつ、良い服を着ていると思ひ込まされ、自己暗示をかけ、こどもから裸を指摘され、笑いものになるという話です。海外では、この演説のうそが指摘され、「自然科学系」の雑誌の「Nature」から、もっと世界の科学者の叡智をかりるべきだという論説が出てくる始末です。日本の誇る技術力で原発を売り込もうとする安倍首相には、自分のうそにしばられてそれもできなくなっています。おまけに当事者の東電がコントロールしていないということを言い出して、ウソつき安倍はまさにわらいものになっています。まだ、日本では経済成長の幻想にとらわれ安倍支持しているひとたちの間では集団心理で裸と言ひ出せないひとが多いのですが・・・。

自分の人気取りの看板の安倍ノミクスもおなじような構造です。福祉のための消費税増税を謳っていたのに、その要の生活保護を切り下げ、介護保険の自己負担率を上げようとしています。そして、消費税増税で景気の冷え込みを押さえると称して、法人税減税をなそうとし、またぞろ公共事業でゼネコンのための事業を増やそうとしています。これはまず、経済成長がすべての始まりとして、それで国民総体を潤すという論理ですが、まず、福祉の基本を増やし、その上での経済成長でない限り、貧困層に救済処置をするといっても、それは焼け石に水でしかなく、困窮化を増大させることになります。またぞろ、餓死事件の報道が増えていくことになります。そして、結局中間層を貧困化して、ますます格差拡大していくことにしかならないのです。それにそもそも、安倍ノミクスは結局投棄マネーを呼び込むという小手先の操作の手法で、これはバブル崩壊と同じ轍へ踏み込んで行

っているとしかとらえられません。そもそもマクロな経済のとらえ方がないから、グローバル化した資本主義経済では経済成長など収束していくというのがとらえられず、経済成長の幻想にとらわれて、破綻への道に踏み行っているのです。

結局目先の利益を追求して止まない財界のためのポチとしてのアベノミクスでしかないのです。

少しずつ、そのおかしさは指摘されてきていて、特に海外での評判はまさに裸の王様ぶりを露呈してきています。

そして、今度は「積極的平和主義」です。集団的自衛権を拡大解釈しようとするアベノリが積極的平和主義なら、日本における戦国時代は「積極的平和主義」の時代で、世界制覇を夢見たヒトラーも日本の侵略戦争も大東亜共栄圏のための「積極的平和主義」です。このひとつには歴史認識が欠落しているのです。

もう言っていることがむちゃくちゃです。少しずつ、裸の王様という内容が指摘されてきていますが、小泉構造改革が引退した後に批判されたように、経済破綻するまで、経済成長という幻想へのとらわれ、裸の王様状態へのとらわれが続くのでしょうか、経済成長の幻想からの脱却は、社会を根底から変えるという勢力の出現と成長なしにはなしえず、それが今問われているのだと思います。今、なしえることから少しずつ一

(み)

## 読書メモ

今回はほとんど本が読めず、読書計画から離れて、気になった読みやすい本を何冊か読んでいました。メモもざーっと流したという感じになっています。少しずつペースを取り戻して来ています。ぼつぼつ系統的な読書も再開します。

たわしの読書メモ・・・ブログ 231

・西村理佐『長期脳死の愛娘とのバラ色在宅生活 ほのさんのいのちを知って』エンターブレイン 2010

ブログ 229 の小松さんの本の中で紹介されていた「長期脳死」とか「植物状態」とか規定された子どもと母のコミュニケーションの記録です。

前半は生きる「闘い」の記録。でも、闘いになるのは介助の態勢が作れない中で、親が倒れる、わずかの判断ミスが様態の急変につながるという「闘い」です。それでも、楽しみながらの子育てにしていっています。後半は脳死臓器移植法「改正」が脳死をひとの死として改訂されていく中で、まさにひととして認められないことのおそろしきで反対の意志表示をしながら、一方で移植臓器を待つ親との対立の構図に理不尽さを感じつつ、それでも娘は生きてると叫びつづけなければならない、この現状に対する怒り苦悩を記しています。子どもの生きる道筋を作ろうという闘いとそこでのコミュニケーションがとれていく楽しみを作り出していく、「バラ色の在宅生活」、そして「ほのさんの命を知って」という訴えなのです。

まさに生の記録、それを脳死はひとの死という規定をしていくなんというおかしさ、おそろしき一

たわしの読書メモ・・ブログ 232

・鈴木文治『ホームレス障害者: 彼らを路上に追いやるもの』日本評論社 2012

ホームレスのひとたちの中かなりの「障害者」がいるという、キリスト教教会を中心にホームレス支援をしていたひとの、「特別支援学校」にも関わり、教育という視点も含めた実践に基づく記録です。

そもそも「障害者」と非「障害者」を分けていくことへの疑問なりということも含め、かなりラジカルな提起をしています。

わたしは無神論者なのですが、宗教者からの運動的な切り込みというところで、共鳴し得ることももてる論攷です。何よりも共生の実践として。そして企業の繁栄が個人の生活よりも優先されるという現在社会の批判も出しているところにも、社会派宗教者としてのとらえかたにも、ラジカルさ（根源的とらえ返しの観点）を感じていました。

ただ、「特別支援学校」を専門性を持った場として評価したり、インクルージョンの規定なり、ICFの評価なり、その中における社会モデルと医学モデルの統合という観点を出していたり、違和を感じてしまうところがあるのですが、小異を捨てて大同につくところではそのようなところは、批判するまでもないのかなという思いを持っています。なによりも共生というところの実践として。

たわしの読書メモ・・ブログ 233

・『障害学研究 9』生活書院 2013

障害学会の機関誌、年に1回の学会の報告をかねて毎年出されています。9冊目になります。

今回の最初の特集は「個人的な経験と障害の社会モデル」です。これは、モリスらの「障害の社会モデル」批判で、「障害の社会モデル」は個人的経験をスポイルしている」ということを内容的に踏み込みとらえ返そうとしています。わたしの関心事と重なっているのですが、どうも内容的にはちっとも踏み込んでいるとは思えません。サブタイトルに「知的障害に焦点を当てて」となっていますが、「知的障害」は「社会的障害」以外の障害はない」という指摘も出ていて、この指摘に合わせれば、そもそもこのテーマ自体が破産しているとかわたしには思えないのです。このテーマの議論の中で「痛み」ということがキーワードになっているようです。読んでいてここで書かれている痛みは、差別に対する痛み以外はとらえられないのですが、そうしたら、それはまさに「障害の社会モデル」の範疇での痛み以外のなにものでもないのではないのでしょうか？

構築主義ということばもでてきているのですが、そもそもインペアメントへの構築主義的とらえ返しというところから、社会モデルを展開していくという流れも出てきているのに、そのあたりの展開もないのです。結局「羊頭を掲げて狗肉を売る」のようなことではないかと思うのです。

特集がもうふたつ、「地域に出る」それは手段だったのか目的だったのか」と「障害者の自己決定権と給付決定の公正性—イギリスにおける自己管理型支援の法的試み」です。前者は「わっばの会」に焦点が当てられています。結局、「わっばの会」はコミュニケーション作り

のようなことのようなのです。そもそも、資本主義社会におけるコミュニケーション作りのようなことがどうなるのか、マルクスの空想的社会主義批判の内容から、わたしは懐疑的な思いを持たざるを得ません。後者はそもそも自己決定とはなにかというところをもう一度とらえ返す必要があるのではと思います。

論文は、「発達障害」と規定される立場で、女性の立場での実経験を生き綴っていくという貴重な文です。

書評がかなり充実してきていて、しかもリプライという形で書評に著者が応答するという形で、論的深化のようなこともこころみられていることを興味深く読んでいました。

いつも、読み終わってから、すぐメモを書いているのですが、今回は間が空いてしまっていて、読み直しもままならず、とりあえず、簡単なメモとして残しておきます。

たわしの読書メモ・・ブログ 234

・『情況 2013年 5・6月号 特集アベノミクス・自民党憲法草案批判、資本論を読み解く、労働運動が直面する課題』情況出版 2013

盛りだくさんな、多方面の論攷です。

特集ではないのですが、「原発事故 そのとき病院が直面した問題」で、原発事故で病院、そして障害（社会モデルでの障害）を受ける中で生きているひとたちが、原発震災の際でいかに困難を被ったかの実例を、病院関係者の証言として出してくれています。同じく特集ではないところで、橋下大阪市長の慰安婦問題での発言に対する撤回要求文、脱原発経済産業省前テントへの仮処分申請の問題を取り上げています。

アベノミクスの分析、いろんな批判が出ていますが、かなり細かい分析を示しています。

それとつながって自民党憲法草案の歴史認識の欠落した反動さを丁寧に押さえてくれています。

労働運動の特集は一活動家の経験した労働運動の経験から、労働運動総体をとらえ返すという作業をインタビューとして示してくれています。

『資本論』特集は、現在的に『資本論』をどうかしていくのか、そして『資本論』をどう読み解いていくのかというところで、興味深い論考です。わたしとしては、廣松さんから影響を受けた日山紀彦さんの「廣松渉『資本論の哲学』入門一步前」がとても刺激的で、わたしの論考にヒントをもらいました。これについては、別稿で展開します。

## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 43号」アップ(13/10/21)

◆三村出版本に対するオープンな批判・意見をこのホームページに掲載していきたいと思っています。とりあえずリアルなやりとりをブログでやりたいと思っています。「対話を求めて」というカテゴリを作りました。そこの「本を出版しました」にコメントという形で応答して下さい。もちろん連絡先にメールも使って下さい。メールをされない方は携帯 090-9857-3431 に連絡ください。

## 後期高齢者医療制度の姥捨て山的性格

母が窒息しかけて、救急車で緊急入院しました。客観的な書き方をしてしまいましたが、嚥下がしにくくなっていて、訪問の看護師さんから嚥下がしにくくなっているというのを指摘されていたのに、頂き物の初物のメロンを勧めていて、「もういい」と母が言っているのに、「もう一口」と勧めて、のどに詰まらせたのです。歯をくいしばり息もしていなかったもので、これは危ないと救急車を呼んだのです。そもそも発熱していて痰がからんでいたのです。それを風邪だと思っていたのですが、誤嚥性肺炎をおこしていたか、おこしかけていたのかもしれませんが。救急車の中で、血中酸素が 40 台まで落ちていて、酸素吸入してやっと 80 台まで戻っていたというかなり危ない状態でした。医者から助かる確率は五分五分と言われ（医者はそもそも危険度を高めにいうものですが）、人工呼吸器をつけるかどうかと訊かれました。それも一般的な自己決定や選択の延長としての家族の意向ではなく、お年寄りだからしんどいだけだと、つけないことを勧める・誘導するような訊き方なのです。何年前から、デイサービスやショートステイで施設を利用するとき、「緊急時に人工呼吸器などの延命治療をしますか？」 というような書類作成が始まっていて、「後期高齢者の医療制度が「自己選択」の名の下に、「姥捨て山」的になっている」と言われていたし、わたしも感じていたのですが、まさに「もういいだろう」というような制度になっているのです。これは、人工呼吸器だけでなく、結局嚥下のテストをして口からの食事がとれないということで、栄養をどうとるのかという話になって、いろんな選択肢を示されたときに、かつては胃瘻ということが主流だったのに、「胃瘻はむやみに命をながらえるだけ」というようなところで、「胃瘻は余り薦められない」というような風潮がでてきていることにも現れています。選択肢のひとつは、「死んでもいいから食べたい」ということも入っていました。これって自殺幫助のようなことではないかと感じていました。結局、胃瘻をしないというのは、点滴の針が入りにくくなっている母の栄養がとれなくて餓死的状態になっていくということで、結局胃瘻という選択を通しました。このあたりは母の意志ということも訊きながらどうしたいのかも確認も必要だったのですが（そもそもこういう自己決定ということ自体にも疑問はあるにせよ）、母はむしろ「がんになっても告知しないで」というひとだったので、母の生きる意志ということをとらえ返した上での判断でした。

さて、母の入院生活介助の中で感じていたのは、そもそも医療や介護制度が何かおかしいということです。どうも医療費の削減というのがあるが、看護が届いていないのです。だから、それを補足しようと思うと、家族が補足するしかないのですが、大方の家族は生活に一杯一杯で付き添いはできないのです。在宅なり、「介護施設」のデイサービスやショートステイは看護が必要なひとは手が回らず看れないのです。病院が少し医療が必要なひとの介護の受け皿にならざるを得なくなってしまう状態です。「在宅介護」が「介護保険制度」の枠内では医療的に使いづらくなっているのです。家族がやるしかなくなり、身が持たなくなると、病院のレスパイト（チェック・リハビリ）入院を使うようになっていきます。そこでも看護の手が足りないという悪循環なのです。

そもそもこのような状況は、社会的な政治的な動きから来ているのです。経済成長とい

う号令で、そもそも何のために、ひとは生きているのかということが本末転倒的になり、働くことが中心になって、「介護」や看護—ケアという、ひとが生きるのに最も必要とされることがなおざりにされているとしかとらえられないのです。自民党政権の復活以降、アベノミクスということの中にそれははっきり現れてきていて、高齢者の行き場がなくなっていくとしか思えないのです。消費税の増税がそもそも福祉のために使うと言いながら、どうもまたぞろお金に色はついていない風で公共投資に回されていっています。一体経済成長で潤うのはだれかということがはっきりとらえられてきているのに、一体どうしてこんなごまかしの政治にだまされていくのか、もう一度、ひとには何が必要なのかという問いから始めることでないかと思えるのです。

## 時局川柳（9）

アベロンリどこかでみたよ裸の王様  
汚染水技術を誇り処理できず  
消費税福祉のためとナマボきる  
財界のポチよろしく海外へ  
成長で幻想振りまき困窮へ  
アベノミクス格差広げる貧困化  
ウソツキと冠をつけらるアベソウリ  
責任のことばを聞くと眉につば

『反障害原論』への補説的断章（18）

### なぜ哲学的なことが必要になるのか？

—実在論と唯名論の対立と「障害の社会モデル」を巡る応酬、

日山紀彦「廣松渉『資本論の哲学』入門一步前」からヒントを得て—

『情況 2013.5・6月号』（情況出版）の特集の1つで「資本論を読み解く」があり、その中で廣松さんの影響を受けた日山紀彦さんの「廣松渉『資本論の哲学』入門一步前」という文がありました。

こんな事を書いていると、また何を小難しいことを書いているのかという批判が出てくるので、最初にコメントしておきます。そもそもエンゲルスが「哲学は死滅した、残るは・・・」という文を残している事に、わたしも一時期共鳴していたことがありました。そのときは「書を捨てて街に出よう」というようなスローガンにも共鳴していました。そして事務的なことに埋没することで、何かやっている気になっているという意味で「事務屋になるな」という批判を受けつつ、それでも実践的活動での事務屋ということに自らの位置を見いだしていました。ですが、60年代後半からの学園闘争、まさに実践的運動の中で「理論なき運動は無、運動なき理論は死」というスローガンにも出ていたように、きちんとした総括や情況分析の中できちんとした方針をもった運動を進めていられない活動は、無になって

いくというという押さえはあったのだと思います。

そういう中で自分自身の最も大きなエネルギーとしてあった「吃音者」の立場で、自らがその「吃音者—障害者」への差別をとらえきれず、挫折します。そのことの総括をかけて、自らを「障害者運動の主体」として展開するには、マージナルパーソナル「吃音者」の立場で、「そもそも障害とは何か」という問い返しを必要としました。そういう中で、わたしがわらをもつかむところをつかんだのが、廣松物象化論であり、マルクスの『資本論』の中で出てくる物象化という概念でした。『資本論』をスイッチバックしながら、何ページか読んで、またそこを読み返し、新たなページをまた何ページか読んで、また読み返すというところで学習し、そして廣松さんの難解な語が連なる本を、労働の合間の図書館通いで、辞書を何冊も脇に積んで読み解いていき、そして基礎学習の蓄積のないわたしにとって、廣松さんの本の読み飛ばし方も身につけ、「難解な」といわれる廣松さんの本が一番読みやすい本になっていきました。「学問に王道なし」という言葉があります。わたしは別に学問をやっているわけではなく、「障害者運動主体」としての立場を確立するために必要だったから、いやむしろ、「障害者」として開き直って生きていくために必要だったから、「障害者」として生きることなしに生きられないという思いで、理論的なことに踏み込んで行き、読み込んでいったのです。

そして廣松哲学との出会いの中で、廣松さんの「哲学の意味はパラダイム転換にある」とかいう提言や哲学的論攷の中で、「哲学とは論理的整合性の1つのスケールである」というようなわたし自身のとらえ方もしています。

何か論争があるときそれを過去の哲学的論争からとらえ返し、その整合性をとらえ返しといけるということです。確かに哲学的論攷はそれなりの蓄積を持たないと、難しいのですが、一度そのスケールを得ると、今度は論争を読み解くのに、わかりやすくするためのスケールになるのではという思いを抱いています。

さて、長すぎた前置きから本題に入りますが、日山さんの論文での『資本論の哲学』の紹介コメントはもっといろんなことを書いてくれているのですが、わたしがその中でインパクトを受けたのは、廣松さんが『資本論の哲学』の中で取りあげている、ベイリーのリカードへの批判の紹介です。リカードの価値実体論とも言うべき論攷をベイリーは価値唯名論的立場から批判しているということを廣松さんは書いていたという内容です。そこで、廣松さんの書いていたのは、(『資本論の哲学』が手元になく、また読み返す時間がとれないので、わたしの廣松さんの論考をそれなりにとらえ返し中での解釈ですが、) 廣松さんは過去の哲学の二項対立的論争を押さえた上で、それらを双方とも批判していきます。このあたりはデリダがターム次元ですが、二項対立を越えて脱構築していこうとしたことに通じることであります。もちろん、廣松さんはそれらのことを無から論じていったのではなく、マルクスの文献学的とも言えるような精密な研究を経て、マルクスが哲学から、青年ヘーゲル派として出発し、その中の熾烈な論争の中で論考を進め、後に政治経済学批判に没頭していったのですが、その経済学批判の中にも哲学的論考は貫かれているというとらえ方をしています。廣松さんは廣松哲学の影響を受けたひとたちとの編集共著の『資本論を物象化論を視軸にして読む』という本があり、資本論は物象化論というところで貫かれているという主張をしています。そのあたりのことがベイリーとリカードとのとらえ

返しにも出ていくのです。廣松さんの押さえですが、『資本論』でマルクスはリカードの価値実体論的論攷を押さえ、第1章で価値形態論を展開します。それを第1章の最後の節の「商品の物神的性格」で否定するかのようなどんでん返しをします。ベイリーもリカード実体論批判をしていることには評価できますが、問題なのはそれを根拠のないこと、唯名論的などころで批判しているという廣松さんの批判です（という日山さんの紹介）。それは、何の根拠もないこと、もしくは懐疑論的などころで押さえるのではなく、価値実体論は資本主義社会では社会的に妥当なこととしてあるという押さえ方が必要です。実体主義的にとらえるのはあやまりで関係論的などころでとらえ返す必要があるという押さえです。

さて、そこからわたしの「障害の社会モデル」へのこの实在論と唯名論の論争の援用です。

オリバーらの「障害の社会モデル」へのモリスらの「フェミニズム障害学」を名乗る立場からの批判は、「impairment それ自体は歴然としてある」という論理から来ていて、まさに实在論なのです。価値論で言えばリカードの価値実体論という立場に類比できます。オリバーらは別に唯名論ではなく、出てきた順序もオリバーらが先なのですが、価値論におけるベイリーになぞることができることで、唯名論と实在論の哲学的論争の歴史を押さえ、フェミニズム障害学の批判を实在論として批判できたら、障害学はこれほどの混乱をもたらさず、障害関係論という道へストレートに進み得たのではないかと思います。

わたしがやろうとしているのは「障害の社会モデル」の限界性を越えてもう一步進む障害関係論の宣揚です。とりあえず、廣松物象化論—廣松哲学を援用して『反障害原論—障害問題のパラダイム転換のために』で展開しました。この本は「難解だ」ということで、そもそも「障害者運動」の中で基本概念として出されているユニバーサルデザインの思想に反すると批判を受けるというわたしの思いもありました。ですが、この本のオリジナリティは既成の障害概念を哲学的にとらえ返しから転換していくことにあり、そもそも一度そこで押さえおかねばならないこととして、出したことです。で、その読みやすい、わかりやすい版をできるだけ早く出すという試みをしていたのですが、パラダイム転換という哲学的なところこだわっている限りそれは破綻せざるを得ません。

わたしはそのことはむしろ母の介助という具体的課題で、実践的なところから改めて展開していこうとしています。哲学的論攷に関しては、とてもつきあえないという読者がほとんどだと思いますが（そもそも本を手にももらえないのでしょうか）、実践的課題での展開の中で、わたしのやろうとしていることに共鳴して哲学的なところにも興味を抱いて、基礎学習のないわたしを遙かに超えて論を展開していけるひとが出てくれたらと願ったりしています。

この文自体は、中途半端になってしまいました。障害学をやっているひとたちには哲学的なことを一から説明しないと読めないことで、そこまで書けず、哲学とりわけ廣松哲学の影響を受けたひとたちとの対話文としては、障害学的なことももう少し詳しく書かないと読めない文になっています。このあたりは、本の出版の後『情況 2010.7』に載せてもらった「廣松物象化論の反障害論—『反障害原論』の隠されたサブタイトル」と同じく、廣松物象化論の反障害論への援用というわたしのテーマでの小展開で、むしろ廣松シェーレの人たちとの対話が主題で是非批判を仰ぎたいと思っているのですが・・・。



## (編集後記)

◆半年近く発刊をお休みにしてしまいました。丁度、学習のために間を開けることを考えていたところに、介助をしていた母の入院・付き添い、そして看護的な介助に入る中で、技術の習得が必要になり、そもそもわたしは技術の習得がゆっくりで、四苦八苦していました。いろいろ選択決断を迫られる中で、病院での付き添いでの人間模様というか、医療制度の問題性もとらえられ、考え込んでいました。やっと新しい生活の態勢がつくれてきているところです。そのことはむしろ、抽象的な思考に入り込んでいたところから、実践的にとらえ返し、むしろ実践的なところで、何かをつかんでいく、開いていけるのではないかという思いも抱いています。

◆アベノミクスの正体があばかれつつあります。もともと歴史認識がからっぽというか、非論理性的の見本のようなことで、どうしようもない「ロンリ」で、なぜ内閣支持率がそれなりの高さを維持しているのか分かりません。これは橋下大阪市長の維新の会が一時人気を博していたことにも通じています。問題はそのようなアベノミクス批判が浸透していかないということです。原発の推進のロンリが破綻しているのに、それでもあいも変わらず破綻したロンリがまかり通っていく、そのようなところがどこから来ているのか、結局経済成長の幻想に絡めとられていく構図と、差別と怨嗟の相互性にかからめとられているのだと思います。差別というところからきちんと押さえ、反差別の立場性をはっきりとらえかえしていかないとどうしようもない状況になっているのです。それにしてもマスコミもナショナリズムにとらわれ、オリンピック誘致に全面賛同し、「尖閣諸島」や「竹島」という侵略のどさくさに紛れた領土化の構図を批判できないでいる状況です。きちんとした歴史認識が必要なのだと思っています。差別というところから状況を読み込んでいくことが今こそ問われているのです。

◆読書メモは、まとまった読書ができない中で、しかもちゃんとしたメモも作れず不調です。それでも、いろんなヒントをつかめ、しかも介助の中でつかんでいくこととリンクして読書メモはちゃんと作れなくても、それなりに論考を進め得ています。どこかで開花できるのではないかと考えています。

◆介助日記は、まさに実践から何かをつかんでいく、わかりやすい文にしていけることです。まさにひとの生きることを中心にしたサブシステムという概念につながる、何か新しい展開に踏み込んでいけるのではと思っています。ただ、もっと実経験を書いていかないとわかりやすい文にはならないのですが、母のプライバシーとか母の関係性とかいろいろ考えていて、まともや抽象的な話になっていっています。少しずつ、実経験も書けるところを模索していきます。

◆いつも巻末にいれている『「反障害原論」への補説的断章』、わかりやすくはないのですが、廣松シェーレとの対話としてわたしの中でまたひとつの飛躍です。問題はこれをどう対話につなげていけるかです。

## 反障害－反差別研究会

新しい出発に関して二項目を追加しました。

### ■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

### ■連絡先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp)

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>